

# 『やへむぐら物語』諸本の書誌と伝来

Yaemugura-monogatari: Catalogue of Five Variant Manuscripts

神野藤昭夫

KANNOTO Akio

## 要旨

本論考は、中世王朝物語あるいは鎌倉時代物語に属するとされる『やへむぐら物語』の、現在までに知られる五本の写本について、その書誌ならびに伝来について明らかにしたものである。

(1) 静嘉堂文庫本は、古典文庫本の『やへむぐら』により、「やへむくら」の題号で知られている。当該本の外題には「八重葎」とあるが、表紙が改装された際の表記と判断されたものである。ただし、古典文庫本の「やへむくら」の題号表記は、書誌的にはどのような根拠に基づくのか明示されておらず、疑問がある。

また「岸本由豆伎」旧蔵とするのが通説であるが、「稲廬舎蔵書」印は、日下田足穂の蔵印であって、少なくとも、これを根拠として「岸本由豆伎」旧蔵ということではできない。本写本は、江戸初期にさかのぼる書写とされるが、その伝来が明らかになるのは、江戸後期のことである。

(2) 吉田幸一旧蔵本（作楽本）『やへむぐら物語』は、菅原（前田）夏蔭が、難波

から持ち帰った殿岡従本を、文政五年（一八二二）、今井清蔭に書写させたものを親本とし、滋野（會田）安昌が、夏蔭の息夏繁から借覧して、慶応四年（一八六八）に書写したものである。その後、丸山作楽蔵、さらに吉田幸一蔵となったが、現所蔵者は知られていない。夏蔭本の面影を伝える本として信頼をおくことができる。

なお、現在の諸伝本のなかでは、その依拠すべき題号としては、本写本に従うのがよいと判断し、本稿では『やへむぐら物語』と表記したところである。

(3) 吉田幸一旧蔵本（天保本）『やへむぐら物語』（外題）は、(2)と同じく夏蔭本を親本とした系統。「とし子の君」（飯田俊子か）所持本を、天保十二年（一八四一）に、歌人廣田信子が書写したものである。書写年代は、(2)より古い。夏蔭本の孫本にあたり、夏蔭本本文の面影を伝える信頼性において、(2)に及ばない。

(4) 東海大学図書館本は、埴忠宝が前田夏蔭の本を借覧したもので、夏蔭本の子

に相当する写本と推測される。和学講談所から埴忠留の蔵をへて、松平家に渡り、さらに桃園文庫所蔵の後、東海大学図書館の蔵するところとなったと考えられる。

(5)原豊二本は、その伝来および本文の系統についてうかがわせる徴証は、本文の書き入れの有無ならびに校異から推察するほかなく、この点については別稿に

## 一 はじめに

『やへむぐら物語』は、現在、中世王朝物語あるいは鎌倉時代物語に属する一作品として知られている。

この『やへむぐら物語』が、その存在を広く知られるようになったのは、鹿島〈堀部〉正二が「散佚物語「八重葎」に就いて」(『国語・国文』第四卷第七号 昭和九年七月)を発表してからである。推測するに、鹿島は、昭和四年二月に刊行された『静嘉堂文庫国書分類総目録』の「三和文 物語」の条を披見し、調査の結果、「筆者寡聞にして、その伝本の存在を報じ内容の片鱗をだに言及されたのを聞かない」とみて、長らく散佚していた物語と判断を下し、最初の紹介者の役を果たすことになったと思われる。

この静嘉堂文庫本を、「八重葎(翻刻)」として、その全容を紹介したのは、三谷栄一(『実践女子大学紀要』第六集 創立六十周年記念号 昭和三十四年十二月)である。

ついで、今井源衛による、詳細な解題と付注を伴う『やへむぐら』が

譲る。

書誌および伝来を通じて、『やへむぐら物語』が、江戸後期、十九世紀の前半から半ば過ぎにかけて、同時代の人びとの交遊圏のなかで書写、享受されていた様相をうかがい知ることができる。

古典文庫(昭和三十六年十二月)から発刊される。本書は、今日にいたるまで、この物語を読むための基本的注釈書として、生き続けている。静嘉堂文庫本を底本としたものであるが、同時に、吉田幸一の所蔵にかかると二本が存すること、およびその性格について述べ、新たな情報を提供してくれている。

なお、現在、静嘉堂文庫本の「八重葎」は、マイクロフィルム「静嘉堂文庫所蔵物語文学集成」(第三編 説話物語・擬古物語・物語草子 三十一 雄松堂 昭和五十九年六月)に収められている。また、当該本を底本とした、田村俊介による「『八重葎』注釈」上・中・下(『富山大学人文学部紀要』49・50・51号 二〇〇八年八月・二〇〇九年二月・八月)が出現していることを付記する。読解に資する新たな校訂本文を作成し、丹念な考証と語釈を施したものである。

吉田幸一所蔵のうち一本(作楽本)は、市古貞次・三角洋一の『鎌倉時代物語集成』第五卷(笠間書院 一九九二年四月)に収められ、全容を翻刻本文により知ることができる。

さらに、池田亀鑑旧蔵の古典籍が、東海大学の所有するところとなり、

『桃園文庫目録』中巻（東海大学付属図書館 昭和六十三年三月）が刊行されるに及び、『やへむぐら物語』の新たな一本が知られることとなった。当該本については、下鳥朝代「東海大学付属図書館桃園文庫蔵『やへむぐら物語』翻刻（上）」（『湘南文学』37号 平成十五年三月）に、前半部の翻刻紹介がある。

こればかりではない。この四本に加えて、平成二十一年（二〇〇九）に、さらに一本が出現し、原豊二の所有に帰している。

かくして、私たちは、現在、五本の『やへむぐら物語』の伝本を見ることのできる状況にある。

かねて、論者は、静嘉堂文庫本につき原本を調査し、紙焼き写真を手して、新たに翻刻しなおしていた。また吉田幸一からは、吉田二本の紙焼き写真の提供をうけるとともに翻刻公開の許可を得たところから、三本の校異の全容が容易にわかるように、大学院日本文化専攻の院生たちを共同研究者として、三本の全文を併記した対照一覧を作成したところである。ただし、吉田本のうち一本は紙焼き写真（『鎌倉時代物語集成』第五巻所収本）によるにとどまり、原本を実見してはいないことをお断りする。

さらに、論者は、東海大学本を校合するとともに、新出本の所蔵者である原豊二の好意と協力により、同本をも校合し、現存する『やへむぐら物語』伝本文対照一覧の原稿を作成し終え、共同研究者による入力、確認の作業を進めているところである。

本稿は、このような研究経緯のうち、『やへむぐら物語』諸本の書誌に

かわる基本情報を整理し、とくに各伝本の伝来について追尋することによって、諸本の性格把握のための諸前提を明らかにすることを目的とするものである。したがって、本稿の範囲では、全伝本の校異まで視野に収めての議論に及ぶことは控えた。

しかしながら、本稿は、諸本の伝来につき判明したところを、個個羅列的に記述しただけのものではない。この作業によって、多くの隠れた識者たちがこの『やへむぐら物語』に関心を寄せ、その所蔵した時期や享受圏にかかわるさまざまな連鎖が浮上してきたのは興味深いところであり、煩瑣ではあるが、その点にも意を用いて述べることにした。

## 二 諸本の書誌情報

はじめに、諸本の書誌情報について整理する。なお、以下の書誌情報は、私が見るに及ばない点は、先行の情報をあわせ参看したものである。

### (1) 静嘉堂文庫本

写本一冊。表紙は、薄紺色紙表紙。表紙と裏表紙の下部に花文様を散らす。表紙のみ改装。寸法は、二二・八cm×十五・八cm。

外題は、題簽（十六cm×三cm）に「八重律 完」と記し、左上に貼付する。内題はない。右下に、函架番号（14983/1/81 68）の貼付がある。

料紙は薄様楮紙、袋綴。遊紙は、前後ともになく、墨付き六八丁。一面十行、一行二四字前後。蔵書印は、一丁オ上部に「稲廬舎蔵書」、同下

部に「静嘉堂蔵書」、本文末尾に「静嘉堂蔵書」がある。

書人には、引歌、引詩のあることを示す庵点（合点）がある。本文と同筆。

奥書識語はない。

本写本の書写年時については、「書写はさう古いものではないが、さりとて江戸時代を余り下るものでもあるまい」（鹿島正二）、「江戸初期写」（三谷栄一）、「近世初期の書写」（今井源衛）とみるのが通説である。

なお、本写本を底本にした今井源衛編『やへむくら』（古典文庫）が、外題の『八重葎』と表記しなかったのは、表紙・題簽ともに改装されたものとみての所為であろう。ただし、変体仮名で「やへむくら」としたのは、あたかも当該写本のしかるべき表記に依拠した正式なものとの誤解を与えるところがあることを指摘しておく。

また「稲廬舎蔵書」の意味するところについては、後述する。

## (2) 吉田幸一旧蔵本（作楽本）

写本一冊。寸法は、二七・五cm×十九・八cm（今井による）。外題は、題簽に「やへむくら物語」と記し、左上に貼付する。「やへむくら」の字母は「屋遍武具良」である。

内題は、中央に「やへむくら物語」と打付書（直書）にする。字母は「耶徹武具良」。内題の右下に「會田家蔵書」の蔵書印がある。

本文は、墨付四九丁。遊紙は、前後ともない。一面十二行、一行二七字前後。墨付き一丁右上に「源朝臣作楽印」の丸形の蔵書印がある。

本文のほか、庵点、圈点、傍点のほか鉤印の書き入れがある。これは朱筆であるという（三角洋一による）。また「夏蔭云」という墨筆による書き入れがある。

奥書は、朱筆によるものと墨筆によるものがある。

朱筆によるものは、本文が四九才一行でおわり、その余白に、左寄せ、三字下げ三行書きで、次のとおり記す。

文政の五とせといふとし霜月はしめつかた一わたり本よみ

あはせつ此物語はわか友殿岡従か難波より得て帰れ

るを借て今井清蔭に筆とらせしなり 菅原夏蔭

墨筆によるものは、四九ウに、これまた空白をおいて、左寄せ、三字下げ四行書きで、次のとおり記す。

此ものかたりふみはよにいとめつらかなるものそとて夏繁大人

のかしあたへられたるをかたのことくうつしと、めたるは

慶応の四とせといふとしのきさらきはしめつかたなり

滋野安昌

写真でみる限り、朱墨同筆と判断される。

なお朱筆部分の「殿岡従」を、今井源衛は「殿岡漠」と読んでいる。この点は、後述する。

ここから、滋野安昌による慶応四年の書写であることが判明するが、伝来の詳細について、後述する。

また、本伝本は、「滋野安昌書写本」「慶応本」などと称することが適当と考えるが、今井が既に「作楽本」と称しているので、混乱を避ける

ために、この呼称を踏襲する。

なお、本写本は、既に吉田家の手から離れ、現在の所蔵者は不明である。

(3) 吉田幸一旧蔵本 (天保本)

写本一冊。帙は後補。帙には、左に「八重律物語 一冊」と記した題簽があり、題簽の左下に、「幸」の小印がある。料紙は楮紙で袋綴。裏表に柿渋色の紙を貼り表紙とする。原装。寸法は、二七・六cm×十九・七cm。表紙中央に「やへむぐら物語」と打付書で外題を記す。内題はない。裏表紙の右肩に、「ISSEIDO」(一誠堂)のレットルがある。

本冊内に蔵書印はない。

遊紙は、前にもみ一丁。墨付き六二丁。一面十一行。一行二五字前後。書入は、朱による濁点表記、朱による本文訂正箇所がある。同筆とみられる。

書写年時は、天保十二年十二月書写。これについては、識語ならびに後論参照。

保存状態は やや良。一部虫損がある。

奥書は、本文が六一丁オ九行目で終わり、やや字体を小さくして三字下げ三行書きで、次のように記す。内容的には(2)と同じである。

文政の五とせといふとし霜月はしめつかた一わたり本よみ

あはせつ此物語はわか友殿岡従か難波より得て帰れ

るを借て今井清蔭に筆とらせしなり 菅原夏蔭

六一丁ウから二行分ほど間を空けて、識語が、こちらは本文と同じ高さで、かつやや字体を大きくして、六二丁オにかけて、次のように書かれている。

筆をとれはものか、れ杯をとれは酒を思ふとの給ひしことく世の中にあることすく世なくては行あふ事かたしわれはやふより物かたりものに心いれて明くれのもてあそひものとはもの、本より外なししかるにこたひとし子の君よりかあへ給ふたるやえむく<sup>(マ)</sup>らてふ物語はあはれにをかき草紙にて言葉のみやひかなること又うたのえんにやさしき事中くこと物語にすくれてをかしうち見るとつたなき筆に書うつすものは

天保十二巳冬月末写之 廣田信子

六二丁ウは白。続く裏表紙の右の箇所、次の書き入れがある

末の世の人しみの住かとなすことなかれ

なお、帙内には、吉田幸一による、次のようなメモ書きが貼り付けられている。

伝本

一、静嘉堂文庫本

一、弘文莊目録 第六号(昭和十年十二月)に

八重葎 富士谷成章自筆写本

宝曆九年二月中院 成章

寛政七年中夏写之 成字

一、架蔵本 菅原夏蔭奥書本

天保十二年文月写 廣田信子筆者

他に伝本を聞かず 以上

吉田幸一誌

とある。ただし、二番目の部分を、赤鉛筆で四角に囲み、「八重葎」とある上部に「やへむくら物語にあらざ」と記す。

弘文荘目録所載の「八重葎」は、現在、『別本八重葎』として知られているもの。このメモを書いた後、吉田はこちらも入手して、『やへむくら物語』ではないことを確認して赤鉛筆で書き入れをしたのであろう。また、このメモに「他に伝本を聞かず」とあるところから、吉田は、この(3)の後に(2)を入手したことが推測される。

なお、本写本は、八木書店をへて、現在、紫草書屋の蔵するところとなっている。

本書もまた、今井に従い「天保本」の呼称を用いる。

#### (4) 東海大学図書館蔵本

写本一冊。表紙共紙とも原装。寸法は、二七・一cm×十九cm。料紙は、薄様楮紙。袋綴。外題「やへむくら物語」（屋弊無九羅物語）は、表紙左に、打付書。右肩に「部／第廿八／共」のラベル。右下に「桃園文庫／函／架／冊／No.7494」のラベル。他に「桃園文庫 桃12／36／冊1／No.607861／東海大学」の見出しラベルが添付されている。内題は、左部に「やへむくら物語」とある。墨付七四丁。遊紙前後と

もになし。一面十行、一行二十字前後墨付一丁オの右上に「松平家蔵書

印」。右下に「和学講談所」の蔵書印がある。なお、七四丁ウの左下に「埴忠寶図書印」がある。<sup>1)</sup>

書入には、庵点、鉤印がある。奥書、識語はない。

書写年時は、江戸時代後期か。後述するところがある。短冊が三枚挟み込まれている。東海大学図書館の手になるものであろう。

青紙 7494/607861/2362

白紙 やへむくら物語 古写一冊 貴 7494

鉛筆メモ書き 保己一の男 埴次郎（忠宝）の所蔵カ

白紙の「貴」のみ朱筆きである。

なお、本写本については、『桃園文庫目録』中巻（東海大学付属図書館昭和六十三年三月）のほか、下鳥朝代の翻刻があること既述のとおりである。

#### (5) 原豊二蔵本

写本一冊。表紙本文とも原装。表紙の料紙は、本文の楮紙に同じ。袋綴。寸法は、二七・二cm×十九・三cm。外題は、表紙中央に「八重葎物語」と打付書にする。内題はない。

本冊内に蔵書印はない。遊紙は前にはなく、後に一丁。墨付六一丁。

一面十行。一行二四字前後

書入は、庵点がある。ままた濁点表記がある。奥書、識語などはみえない。

保存状態は並だが、虫損が認められる。書写年時は江戸時代後期と推測される。

本書の書誌情報は、原豊二の調査報告と写真の提供にもとづき、私に書き改めたものである。

本書は、原豊二本と称することにす。

### 三 諸本の伝来情報とその解説

前節の書誌情報にもとづき、各伝本の伝来について解説し、あわせて、当該本の性格の一端にふれる。

#### (1) 静嘉堂文庫本の伝来

静嘉堂文庫本の伝来については、「稲廼舎藏書」印がほぼ唯一の情報である。

「静嘉堂文庫蔵（岸本由豆伎旧蔵）」（三谷）、「静嘉堂本は岸本由豆伎旧蔵で「稲廼舎藏書」印があり、奥書はない」（今井）とするのが通説である。「岸本由豆伎旧蔵」とするのは、「稲廼舎」が由豆伎の号であったとみることか、他に「岸本由豆伎旧蔵」であることを示す証拠があつたことか、不明である。

後者の場合は、私の判断を留保せざるをえないが、前者の理解によるとすれば、「岸本由豆伎旧蔵」とすることには、疑念がある。

本稿では、最初に通説に従った場合の情報解説を試み、ついで「稲廼

舎藏書」印の意味するところを考え、新たな旧蔵者とそこから得られる情報との場合に分けて考察を加える。

はじめに「岸本由豆伎旧蔵」とみることを前提にした場合について述べる。これはおのずから、「稲廼舎」が由豆伎の号であったとの理解と深くかかわる。

岸本由豆伎は、岸本由豆流（一七八八〜一八四六）の息、嘉永四年（一八五二）十一月十三日、三一歳没（『和学者総覧』による）とあるから、文政四年（一八二二）の生誕になる。由豆伎については、森繁夫編・中野莊次補訂『名家伝記資料集成』I（思文閣出版 昭和五十九年二月）に詳しい資料情報の記載がある。

父、由豆流は、伊勢国飯南郡朝田村（三重県松阪市）の人。江戸に出て、弓弦師岸本讃岐の養子となる。通称大隅権之進とあり、「ゆづる」は、弓弦師の家にちなんでの名乗りであろう。だが、由豆流は早くより書を読むことを好み、家業は長子に譲り、村田春海（一七四六〜一八一二）門下の歌人となり、柩やまぶきのその・園・棟堂、尚古考証園、露園などと号して、「土佐日記考証」など考証にすぐれた注釈を数多く残している。由豆流は、生家の朝田姓の方を、次男弓楳に継がせ、みずからは著述に専念。蔵書家としても知られ「ソノ儲ヘタル書、三万巻ニ及ベルトゾ」という。狩谷楳齋とはことに親しかったという（『国学者伝記集成』ほかによる）。

村田春海門としては、清水浜臣（一七七六〜一八二四）や考証学者で蔵書家として知られる小山田与清（一七八三〜一八四七）がいることに目をとめておきたい。

かかる経緯を考慮すれば、岸本由豆伎は、朝田由豆伎と表記するのがよく、『和学者総覧』が「朝田由豆伎」で掲出しているのは、こうした判断によるものである。通称は権之丞。由豆伎（弓槻）の名は父の養家の業にちなみ、学は父の業を継いだということになる。

由豆伎は一八五一年に三一歳の若さで亡くなる。父由豆流が亡くなった一八四四年には、二五歳であったことになる。「稲廼舎藏書」印が押されたのは、父の没後、由豆伎の生前の間か。

本写本の書写が、通説にしたがい近世初期にまで遡ることができるとして、その間の伝来は明らかではない。蒐書に熱心であった父由豆流の代に蔵するところとなった可能性もあるが、由豆伎の代に所有に帰したと見れば、それは十九世紀の半ば近くのことになる。これは、『八重葎』諸本の伝来を考えるうえで、興味深い情報である。

次に、「稲廼舎藏書」の印があることをもって「岸本由豆伎旧蔵」を意味するとみることに對する疑問を述べる。

第一は、『名家伝記資料集成』の朝田由豆伎の条には、「号弓槻 由徴」とあるばかりで、「稲廼舎」の号はみえない。その他の伝記情報、印譜類を調べたり限りでは、その裏付けを見出すことができないでいる。論者の無知による所為もあるが、それが第一の疑問点である。

一方、『名家伝記資料集成』の索引からは、寺田秀幸なる人物が、「稲廼舎」と称したことを知ることができる。摘記すれば、「武蔵 北埼玉郡 里宮村 幼名 康之丞<sub>后号</sub> 準作 寒翠 稲廼舎 号旭堂 松風斎旦翠 嘉永二巳酉（二五〇九）十一月五日生 佐々木弘綱門 遠州流插花をも

能す（以下略）」とある。二五〇九は皇紀、西暦では一八四九年である。この人物の藏書印と推測することも可能だが、それを証する裏付けが得られない。

次に渡辺守邦・島原泰雄編『藏書印提要』（青裳堂書店 昭和六十年三月）を検するに、その印文篇に「稲廼舎藏書 日下田足穂」とあるのを見出すことができる。足穂は「稲屋之印」の藏印も持っていたらしい。どちらも「いな（ね）のやの印」と読むのであろう。ただし、本編に当該印影は掲出されていない。

しかるに、『図書寮叢刊 書陵部藏書印譜 下』（宮内庁書陵部 平成九年三月）、渡辺守邦・島原泰雄編『新編藏書印譜』（青裳堂書店 平成十三年一月）には、日下田足穂の「稲廼舎藏書」が掲出されている。静嘉堂文庫の印影は、紙焼き写真では不鮮明であるものの、照合してみると一致すると判断できそうである。すなわち静嘉堂文庫の「稲廼舎藏書」印は、日下田足穂の旧蔵ということになる。それにしたがって「稲廼舎藏書」を根拠として、「岸本由豆伎旧蔵」とするのは誤りということになる。

私に知らぬところで「岸本由豆伎旧蔵」とする証跡あるいは伝承があるのかもしれないので、慎重を期して「由豆伎旧蔵」説を否定はしないでおく。『書陵部藏書印譜』によれば、「稲廼舎藏書」印は、黒川本の『紫日記』などにもみえるという。現に、この『紫日記』は、岸本由豆流の旧蔵書でもあったことが知られたりする例である。<sup>2)</sup>しかし、今後は、逆に「岸本由豆伎旧蔵」と見ることに、慎重さが求められてくるであろう。



今、日下田足穂（一八一四～一八九〇）について、『日本人名大事典』に  
より当該項目を掲出すれば、次のようである。

徳川末期―明治時代の国学者。文化十一年八月五日上野館林に生る。

通称嘉平、名は足穂、稲舎と号す。朝倉茂右衛門の五男。幼少より

足利町の商売小佐野清七に養はれ、清七、歌をよくしたので吟詠を

学び、また江戸に赴くごとに橘守部の門を訪うて教をうけ、長歌を

よくしたが、のち遠藤氏の養嗣となる。明治二十三年十二月六日歿、

年七十七。その著に『稲舎長歌集』がある。（『国学者概伝』窪田）

『稲舎長歌集』は、明治十九年七月、東京の金花堂から、和装二冊本と

して出ている。佐々木信綱編『続日本歌学全書』第九編（近世長歌今様歌

集）（博文館 明治三十二年）は、「稲舎長歌集（抄）」を収める。彼の長歌

は、新体詩以前の明治の新様を意図するところがあつたが、「形式価値の

旧套を出でない昔ながらの長歌の亜流にすぎなかつた」と『増補改訂日

本文学大辞典』（新潮社 昭和二十五年）の「新体詩」の項は述べている。

今も、足穂の短冊などは坊間に出るのをみることがある。

そういう人物が『八重葎』を所蔵する時期があつたといふことである。

この写本は、大雑把ながら、十九世紀の半ばには、足穂の蔵するところ

となつて伝来の足跡を残し、その後、静嘉堂文庫の所蔵するところとな

つたのであろう。

なお、丸山季夫『静嘉堂文庫蔵書印譜』（青裳堂書店 昭和五十七年三月）

には、採録されていない。印影が不鮮明であることによるうか。

## (2) 吉田幸一旧蔵本（作業本）の伝来

本写本の伝来にかかわる情報は、次のとおりである。

① 朱筆による菅原夏蔭の奥書（前節参照）

② 墨書による滋野安昌の奥書（前節参照）

③ 「會田家蔵書」印

④ 「源朝臣作楽印」印

まず①②から得られる情報を整理する。

奥書①の文意は「文政五年（一八二二）十一月初め、はじめから終わり

までひとわり読み合わせをした。この物語は、私の友人である殿岡従

が難波から入手して（江戸に）持ち帰つたものを借覧して今井清蔭に書

写させたものである。菅原夏蔭」といふものである。

②の文意は「この物語書は、たいへん珍しいものであるといつて、夏

繁大人が貸してくださつたのを、その本のとおりに書き写したが、それ

は慶応四年（一八六八）の二月初めのことである。滋野安昌」といふもの

である。

②は、当該写本に関する情報であり、①は、親本に記されていたもの

といふことになる。

はじめに、親本は、菅原夏蔭が、殿岡従所持本を、今井清蔭に書写さ

せたものという情報を膨らませ捉えなおしてみよう。

この本を関西より入手してきた殿岡従は、殿岡従瓊（一八八二～一八六

五）のことである。名は「従」（『和学者総覧』汲古書院 平成二年三月）。慶

応元年（一八六五）六月に八四歳で亡くなっている。清水浜臣・田中大秀門であり、菅原夏蔭も清水浜臣門下であったから、同門の間柄ということになる。その縁で、夏蔭は借覧することを得たか。

菅原夏蔭は、前田夏蔭（一七九三～一八六四）のこと。『和学者総覧』には本姓「菅原」とみえる。寛政五年（一七九三）に生まれて、元治元年（一八六四）八月に、七二歳で没している。したがって、当該本の親本にあたる夏蔭本は、一八二二年、従が四一歳、夏蔭が三二歳の時に書写されたものということになる。

夏蔭の師事した清水浜臣（一七七六～一八二四）は、浜臣は、文政七年（一八二四）に、四九歳で没した和学者で蔵書家である。号は泊舎<sup>はつみや</sup>。本居宣長の鈴屋派と対抗した江戸派歌人で、国学者の村田春海（一七四六～一八一二）門下である。同門の小山田与清（一七八三～一八四七）と双壁と仰がれたという（『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店 一九九九）。

夏蔭（一七九三～一八六四）は、天保（一八三〇～四〇）頃、下谷泉橋通に開塾。水戸烈公（徳川斉昭）の愛顧をうけ、水戸藩の江戸駒込中屋敷で国学を講じ、慶喜も師と仰いで、「未ダ齡三十二至ラズシテ、既ニ諸侯ノ弟子、門ニ満チ溢レ」たという（『国学者伝記集成』所収「高等国文」）。また、松前半島をのぞく蝦夷地全域を直轄支配下においた江戸幕府は、蝦夷関係資料の集大化をはかるが、夏蔭はその主任として『蝦夷志料』の編纂にあたっている（『国史大辞典』吉川弘文館）。この点は、(4)と関わるところがあるので、注目しておきたい。

その夏蔭が、「今井清蔭」に殿岡本を写させたというわけだが、『和学

者総覧』には「清蔭」を名乗るもの七名がみえるものの、特定するにいたらない。夏蔭の門人であろう。

ここで、②の情報にうつる。

この識語から、滋野安昌が、慶応四年（一八六八）の二月初め、「夏繁大人」から借りて「かたのことく」写したものであることを知ることができるわけであった。

「夏繁大人」とあるのは、夏蔭の息である前田夏繁（一八四一～一九一六）のこと。大正五年に七六歳で亡くなっているが、国学を父に学び、父の遺業（『蝦夷志料』）を完成させている。夏蔭本は、息の夏繁が所蔵していたことになる。それは、慶応四年二月までは存在していたことになる。

この慶応四年二月というのは、一月三日に鳥羽伏見の戦いがあり、十五日に新政府が王政復古を各国の公使に通告。二月十二日に徳川慶喜が上野寛永寺に蟄居するという緊迫した時期にあたる。その頃、滋野安昌は夏蔭の息夏繁から夏蔭本を借覧し、「かたのとおり」すなわち忠実に書写したという。

この「かたのとおり」とある証跡は、次のような点に見出すことができようか。

本写本の書人には、「夏蔭云」という墨書による頭書が三カ所みえる。また三角によれば、②の奥書及び庵点、圈点、傍点のほか鈎印の書入などは、いずれも朱筆であるという。論者は、当該写本を実見、確認してないので、推測の域を出ないのだが、これらは、今井清蔭に書写させ

たもの、夏蔭が書き加えた奥書などを明示しようとしたものか。

これらは、本写本が、夏蔭本の面影を「かたのこく」写したという②の識語を裏付けるものであり、書写年時は古くないが、夏蔭本の書写の信頼性において高く評価できることになろう。

翻って、ここから、朱筆による庵点、圈点、傍点のほか鉤印が夏蔭の個人的な所為か否かの問題が浮上してくる。だが、論者が見ているのは②の紙焼き写真によること、諸本の異同状況を見合わせる必要があること、の二点から、今後の検討に譲りたい。

ところで、当該②の「作楽本」は、滋野安昌書写本そのものと考えてよいのであろうか。滋野安昌とは誰かという問題でもある。

そこで注目されるのが、③の「會田家蔵書」印である。

『大日本人名辞書』（明治十九年初版。今、大正十年増訂九版の『大増補 大日本人名辞書』による）の「アヒダ ヤスマサ」（會田安昌 一八三〇〜一八九五）の項には、「會田安昌は歌人なり国学に通ず宮内省御歌所に仕ふ明治二十八年一月廿一日没す年六十四」とあり、『国学者伝記集成』続の総叙は、この項を引用している。滋野安昌の「滋野」の来歴は特定できないが、「安昌」と蔵書印の関係から判断して、滋野安昌と會田安昌とは同一人物と考えてよい。慶応四年は、安昌三七歳の時にあたる。

なお、③の「會田家蔵書」印は、『図書叢刊 書陵部蔵書印譜 下』、『新編蔵書印譜』にもみえるところである。

そこで、④にうつる。

「源朝臣作楽印」からは、「會田家蔵書」の滋野安昌自筆書写本が、後

に源朝臣作楽すなわち、丸山作楽（一八四〇〜一八九九）の所有に帰したことが判明する。<sup>③</sup>安昌本が作楽に手に渡った時期については、不明というほかない。

なお、丸山作楽は、明治二年に設立された大学校における国学派の急先鋒であり、漢学派との対立のために大学校は、翌年瓦解する。その時の大学別当が松平慶永であり、②の東海大学本は松平慶永の所有していた可能性がある。この点については後述する。

以上をまとめると、②は、殿岡本を書写した夏蔭本を転写したもので、夏蔭本の姿をかなり忠実に伝えるものと評価できる。その所蔵は、書写者安昌の「會田家」から、丸山作楽に移り、やがて吉田幸一の蔵するところとなったが、現在、吉田家からは離れ、現所蔵者は不明である。

### (3) 吉田幸一旧蔵本（天保本）

本写本の伝来にかかわる情報は、次のとおりである。

- ① 菅原夏蔭の奥書（前節参照）
- ② 廣田信子の識語（前節参照）
- ③ 末の世の人しみの住かとなすことなかれ
- ④ 一誠堂のレットテル（表紙見返し右上部）

①から得られる情報は、前項②で述べたところであって、本写本が、殿岡本―夏蔭本の系統であることを証するものである。

②の文意は「筆を手にはすれば、なにか文を綴らずにいられない。盃を手にはすれば酒を思わずにいられない。そう古人兼好法師は述べられたが、

この世の中のあらゆることが宿世というものがあってはじめてびたりと一致するのである。私は齢若い時から、物語類に夢中になって、日日の慰みものとしては、書物よりほかになかった。ところがこのたびとし子の君の方からご貸与くださったやえむぐらという物語はしみじみとした感興をそそられる草紙で、その言葉の雅趣に富んでいること、またその歌の趣深いやさしさに満ちていること、ずいぶんと他の物語と比べ優れておもしろく、読みみるたびごとに、目の覚める感じがして、読むだけで捨ておくのは思慮のたりないことと考えて、拙い筆をとって書き写したものである。天保十二年（一八四一）十二月末にこれを写す 広田信子」というものである。

冒頭の「筆をとればものか、酒杯をとれば酒を思ふ」は、『徒然草』にみえる「筆を執れば物書かれ、楽器を取れば音をたてんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽をとれば攤打たん事を思ふ。」（『新潮日本文学集成』第百五十七段）の一節によるもの。「古人」とは兼好のことである。

「巳冬月」は十二月のこと。帙内の残された吉田メモが「文月」とするのは、「巳冬月」と読むべきところを誤ったものか。

①の奥書があるところから、「とし子の君」なる人物が持っていたのは、夏蔭本系統の本であることがわかる。もとより夏蔭本そのものとは考えがたく、夏蔭本の転写本であろう。それを広田信子が、天保十二年十二月に転写した本ということになる。知られる範囲内での想定として、殿岡本―夏蔭本―とし子所持本―広田信子本ということになる。

広田信子の書写態度は、写本をみるかぎり丁寧である。しかしながら、

この本の本文は、他本と校合してみると、本稿では逐一指摘しないが、誤写・誤脱が目につくのである。ある種の杜撰さは、「とし子の君」なる人物の所蔵本に由来するところも大きいのではないかと推測される。

「とし子の君」とは誰か、特定するにいたらない。『名家伝記資料集成』を検するに、飯田俊子（一八一七―一八八三）なる人物がいる。『鳥取県志』高郡の人 飯田年平の姉 飯田秀雄の女 京都東園寮士杉本主膳に嫁す 本居大平門 和歌を能くし 古典に通ず 晩年気高郡に帰り風月に心を潜む<sup>4)</sup>とある。父秀雄（安政六年歿）、弟年平（一八一〇―一八〇四）ともに『国学者伝記集成』にその履歴が載る。とくに年平については、本居大平・加納諸平に学び、歌人として知られ、国学所の教授となったことがわかる。「飯田俊子」は、この物語の伝来史にかかわるにふさわしい存在といえようが、夏蔭本の転写本を所持し、広田信子にそれを貸与するという関係の接点を考えてみると、いましばらく特定は保留しておくのが慎重な判断といえようか。

だが、「廣田信子」については、『江戸現在広益諸家人名録』（天保十三年（一八四二）夏 版元須原屋佐助 『近世人名録集成』（勉誠社 昭和五十一年四月）所載による）に、次のような記事を見出すことができる。<sup>5)</sup>

文雅 名濱菖 号神風舎 四谷傳馬町三丁目  
濱菖 廣田伊兵衛  
和歌 名信子 同人妻 同所  
信子 廣田濃婦子

文雅として「廣田濱菖」の名があるが、狩野快庵編『狂歌人名辞書』

(文行堂広田書店 一九二八／臨川書店 一九七七)には、「神風舎濱荻、通称廣田伊兵衛、東都四ツ谷傳馬町に住す、天保頃。」とあり、狂歌師として知られていたことがわかる。信子は同人の妻で、歌人として人名録に掲載される存在であった。同一人とみてよいように思う。

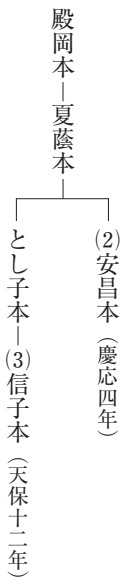
信子が『やへむぐら物語』を書写したのは、天保十二年(一八四二)のことであった。このような珍しい物語を所有することは、歌人としてのステータスを示すことにつながるものがあつたらう。

少し広い視野からみると、夏蔭所持本が、女性たちの手に渡って転写されていることは、江戸の女性たちの王朝物語愛好の流行とその系譜に加えるにふさわしい情報の一環として注目されよう。

③もまた、信子の本物語あるい本写本に対する愛着をしのばせるものである。

④のレットルは、本書が、一誠堂の手をへて、吉田幸一の蔵するところとなったことが知られる。帙の題簽『八重葎物語 一冊』の下に「幸」の朱印がある。吉田幸一蔵であった来歴を示す。なお、吉田没後、八木書店の手をへて、現在は、紫草書屋の蔵するところとなっている。

(2)(3)との伝来を図示しなおしてみると、次のようになる。



(3)の信子本(天保本)は、天保十二年と書写年代において、(2)の安昌

本(作楽本)により古いが、(2)の書写態度、及び(3)が夏蔭本の孫本と考えられるので、伝来からすると、(2)を善本と考えるのが妥当であろう。

#### (4)東海大学図書館蔵本

本写本の伝来にかかわる情報は、次のとおりである。

①「和学講談所」印

②「塙忠實図書印」印

③「松平家蔵書印」印

①及び②から得られる情報から考えてみることにしよう。<sup>6)</sup>

和学講談所は、塙保己一(一七四六―一八二二)が、寛政五年(一七九三)に幕府の公許を得て、江戸麹町裏六番町に設立。のち表六番町に移る。林大学頭の支配をうけ、幕府の文教体系のなかに組み込まれた。門人中山信名・屋代弘賢らの協力のもとに『群書類従』『統群書類従』『武家名目抄』などの編纂を行ったこと広く知られるとおりである。

保己一の死後、その子忠宝(一八〇七―一八六二)が、文政五年(一八二二)に和学講談所御用掛となり、事業を継続する。本書に②の蔵書印を残す人物である。しかし、明治前夜の風雲ただならぬ時代、忠宝は、尊讓派のために暗殺される。その間の事情について『大増補大日本人名辞書』は、「鈴木重胤その日本書紀伝に記して云く次郎前田夏蔭と老中安藤信正の命を以て廢帝の典故を按ずと蓋し屢々信正の邸に召されて寛永以前幕府が外国人を遇せる式例等を取調べしを誤り伝へたるならん」と記す。この時の下手人は、伊藤俊輔(博文)、山尾庸三であったという。

ここに「前田夏蔭」の名前が出てくることに注意したい。(2)のところであつたように、夏蔭は『蝦夷志料』の編纂にかかわっており、外国ことに十八世紀末より頻々と北辺に來航するロシア船との対応については詳しかったと見てよいであろう。

三代目にあたる忠韶（一八三二―一九一八）は、その業の継承と再興をはかるが、明治元年（一八六八）に廃される。廃止当時の所員は四十一名、継続年数七十六か年であつた（『日本古典籍書誌学辞典』による）。完成して四三〇冊の史料は、明治政府に引き継がれることとなつたが、福井保（和学講談所と内閣文庫『塙保己一論纂』上巻 温故学会編錦正社 昭和六十一年三月）によれば、和学講談所は、實質上、明治新政府に献納され、蔵書の管理もまた忠韶に委任される。しかるに、明治五年に書籍館の新設に伴い、政府は、その蔵書の充実のために諸家に献納を求め、忠韶もまた「明治五年三月、文部省編輯寮十等出仕塙忠韶は家伝の蔵書一〇三五部、九、六六二冊を文部省に献納し、金三百円の賞賜を受けた」といふ。

また『和学講談所蔵書目録』（写本）は、およそ三一〇〇部一万八千冊をあげる。旧蔵書の約半分は、現在、内閣文庫に残る。

こうした状況から推論する。

和学講談所は、その編纂事業の目的のために、善本を蒐集したり、諸家から借覽書写した新写本を数多く作成したであろう。現存する『やへむぐら物語』もまた、このような意図に沿って作られた新写本であつたとみられる。

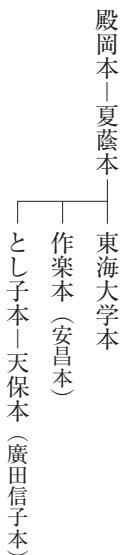
忠宝の不運の死にいたる情報から知られるように、前田夏蔭（二七九三―一八六四）とは年上ではあるが、忠宝は知己の間柄であつたと考えられる。本『やへむぐら』は、夏蔭を通じ、夏蔭本を借覽し、書写したものと考えてよいのではないか。和学講談所で行われている事業については、夏蔭もまた承知していたはずであるから、積極的に提供したことを想定してもおかしくない。

とすれば、書写者は忠宝じしんである可能性もあるが、今、彼の手であることを確認するにはいたらない。今後の調査を待ちたいが、和学講談所の一員の手になるものと考えるのが自然なところであろう。

こうした想定を可能にするには、もうひとつ手がかりがある。それは、作楽本（安昌本）と天保本（廣田信子本）とに共通の本文ならびに書入の特色を共有することである。この点については、伝本文対照一覧を用いて、本文の校異を検討する際に具体的に例証するので、ここでは本文からの類似を指摘できることを述べるにとどめて、深入りはしない。

すなわち、①②の蔵書印は、本写本は、古くから伝来するものを、和学講談所、塙忠宝が所有したというより、写本と所有とが近接していることをものがたるものである。

あらためて系譜関係の想定をしなすと、次のようになる。



なお、本写本本文の評価については、これは稿をあらためて論ずる予定である。

③ 「松平家蔵書印」から得られる情報

①②から推測すると、この後、この写本が松平家の蔵書に帰したと考えるのが自然であろう。だが、この蔵書印を押ししたのが誰であるか、今のところ、特定できないでいる。

ここでは、推測試案を記してみる。本写本は、明治にいたってなお塙家にあり、その後、塙家から手放されることになったと考えられる。

塙家の当主である塙忠韶は、明治二年七月二十七日に、大学少助教に任ぜられている。明治二年の大学校は、旧幕方から委譲された教育施設と組織が明治新政府の教育組織へと改変される中で誕生したものである。和学所（和学講談所）は明治元年に廃され、大学校のなかに吸収されるとみられるわけであって、時に三八歳の忠韶は、この組織の一員となったわけである。この大学校の行政官・教官のありようは、具体的に知ることができる。<sup>7)</sup>

この時、大学校の大学別当兼侍読となったのが、松平慶永（よしなが）（一八二八—一八九〇 号春嶽）である。維新前の福井藩主で、幕政の改革に尽力、幕府・薩摩の調停役とを果たした存在である。新政府にあつては、この大学校の最高責任者となっている。だが、大学校は、国学と儒学の対立から翌明治三年には瓦解する。それを機に、慶永は、いっさいの官職を辞して文筆生活に入り、多くの著述を残して、六二歳で生涯を終えることになる。

塙家にあつた『やへむぐら物語』は、ゆえあつて、この松平家の所有となつたのではないか。

塙・松平の接点から、ひとすじの糸をたぐって、このような想定を試みたが、東海大学本に押された「松平家蔵書印」は、『新編蔵書印譜』を検するに、松平春嶽の六種、福井藩松平家の十二種の印譜には見えない。想定を裏書きするはいたらない。一試案として記すにとどめるゆえんである。

なお、その後、池田亀鑑の桃園文庫の所蔵をへて、現在、東海大学図書館の蔵本となっている。

(5) 原豊二蔵本

奥書・識語、蔵書印などなく、この本の伝来を探る直接的な手がかりはない。

書入、校異から、他本との先後関係を推測するほかない。本写本の本文の性格から、伝来の事情について考えるしかない。この点については、本稿の当初予定の範囲を越えるので、別稿に譲ることとする。

四 結語

現在、その存在が知られる五本の『やへむぐら物語』の書誌とその伝来について、述べた。

以上の記述をふまえて、本稿の記したところの要点のいくつかを、伝

本ごとにまとめ、結語とする。

(1) 静嘉堂文庫本は、今井源衛校注の古典文庫本の『やへむぐら』により、「やへむぐら」の題号で知られているが、これは当該本の外題に「八重葎」とあるものの、表紙が改装されており、その際に表記されたものと判断して採用されなかったものと推察される。しかし、「やへむぐら」の題号表記は、書誌的には何に基づくのか、同書では明示されていない。また「稲廻舎藏書」印は、日下田足穂の藏印であって、少なくとも、これを根拠として「岸本由豆伎」旧蔵ということはできない。本写本は、通説では、江戸初期にさかのぼる書写とされるが、その伝来が明らかにするのは、十九世紀の半ば過ぎということになる。

(2) 吉田幸一旧蔵本(作楽本)「やへむぐら物語」(外題・内題)は、菅原(前田)夏蔭が、難波から持ち帰った殿岡従本を、文政五年(一八二二)、今井清蔭に書写させたものを親本とし、滋野(會田)安昌が、夏蔭の息夏繁から借覧して、慶応四年(一八六八)に書写したものである。その後、丸山作楽の蔵するところとなり、吉田幸一所蔵の後、坊間に流失して、現所蔵者は不明である。夏蔭本の面影を伝える本として信頼をおくことができる。

現存、諸伝本のなかでは、その依拠すべき題号としては、本写本に從うのが適当と考え、本稿で『やへむぐら物語』と表記したところである。

(3) 吉田幸一旧蔵本(天保本)「やへむぐら物語」(外題)は、(2)の同じく夏蔭本を親本とした系統。「とし子の君」(飯田俊子か)所持本を、天保十二年(一八四二)に、歌人廣田信子が書写したものである。書写年代は、(2)より

古い。夏蔭本の孫本にあたり、夏蔭本本文の面影を伝える信頼性において、(2)に及ばない。

(4) 東海大学図書館本は、おそらく埜忠宝が前田夏蔭の本を借覧したもので、夏蔭本の子に相当する写本と推測される。和学講談所から埜忠韶の蔵をへて、松平家(慶永か)に渡り、さらに桃園文庫の所蔵の後、東海大学図書館の蔵するところとなった。

(5) 原豊二本は、その伝来および本文の系統についてうかがわせる徴証は、本文の書き入れの有無ならびに校異から推察するほかなく、この点については別稿に譲ることとした。

本物語は、中世王朝物語あるいは鎌倉時代物語のジャンルに属するが、静嘉堂文庫本が江戸初期の写本とみられているほかは、江戸後期、十九世紀の前半から半ば過ぎにかけての写本であり、その時代の人びとの交遊圏のなかで伝来した様相をうかがうことができる。

### 注

- (1) 「埜忠寶圖書印」の解説には、横田恭三氏のご教示を得た。記して感謝する。  
 (2) 宮内庁書陵部蔵・秋山虔解説『紫日記』(影印本 笠間書院 昭和四十五年四月)には、次のような解説が見える。岸本由豆流・由豆伎の所蔵本が、「稲廻舎藏書」(日下田足穂)の所蔵をへて黒川真道の蔵するところとなったことをうかがわせる事例である。

「上巻の表紙右端中央よりやや上に由豆流田蔵本と墨書、右下方に「朝田所蔵」「青木印」の単面長朱印を捺する押紙二枚、第一丁の表(本文は第二丁裏から書き起こされる)右下方には「黒川真道藏書」の単面長朱印と「稲廻舎藏書」



の複角長朱印とがある。下巻の表紙右下方にも「朝田蔵書」朱印の押紙、第一丁の表には上巻と同じく二つの朱印、また巻末遊紙裏にも左下方に「黒川真道蔵書」の朱印が捺されている。」

(3) 丸山作楽の「源朝臣作楽印」は、林正章編『近世名家蔵書印譜―無窮會圖書館神智文庫本に據る―』（青裳堂書店 昭和五十七年四月）にも見ることができ、

(4) 『日本人名大事典』（平凡社 一九七九年七月覆刻版）には、「和歌を本居大平の門に学び、弘化六年京都の東園家の奥局に仕へ、のち同家の家人杉本主膳に嫁し（以下略）」とある。

(5) 廣田濱萩・信子に関する情報は、阿部江美子氏の調査によるご教示を得た。記して感謝する。

(6) 塙家の人々に関する基本情報としては、『群書類従 正統分類総目録 文献年表』（統群書類従刊行会 昭和三十四年七月訂正増補）に、「温故堂塙先生伝」「塙前総検校年譜」「塙忠寶先生年譜」「塙忠韶先生年譜」「塙忠雄先生年譜」「松山集」「水母文集」を収めている。

(7) 大久保利謙『明治維新と教育 大久保利謙著作集4』（吉川弘文館 昭和六十三年十月）二二二頁。神野藤昭夫「近代国文学の成立」（『森鷗外論集 歴史に聞く』新興社 二〇〇〇年五月）注34参照。

追記 本物語の調査にあたっては、静嘉堂文庫、東海大学図書館ならびに故吉田幸一氏、原豊二氏の格別のご配慮を得た。記して感謝する。

